The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『夢の通ひ路物語』主題分析（二）：岩田中将・かざしの君物語の意義
Author(s)	井, 真弓
Citation	詞林. 2008, 44, p. 41-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67586
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『夢の通ひ路物語』主題分析（二）

――岩田中将・かざしの君物語の意義――

井　真弓

はじめに

二十七年にわたる『夢の通ひ路物語』の歳月[1]の中には、何組かの男女の恋愛模様が描かれているが、特に主要な物語は一条権大納言と京極三の君の恋愛譚である。相思相愛の関係である二人は、京極三の君の父親の遺命のために正式に結ばれることはなく、女君の入内による離別と、その後の一条権大納言の懊悩・悶死という物語展開に多くの紙面が割かれていることから、『夢の通ひ路物語』の全体像はいわゆる悲恋物語の範疇に入るものと考えられている。[2]ただし本物語では、上記の内容の悲恋物語が記された巻物を、一条権大納言の霊から託された吉野の阿闍梨が読み進めるという体裁を取っており、悲恋そのものが物語の直接的な主題となっているわけではない。むしろ悲恋という事象を客観的に捉えた上で、そこから派生した新たな「不幸」――すなわち帝の子として育てられているものの、その実は一条権大納言の子であるという出生の秘密――を三の御子がどのように克服するかを主眼として物語が構成されている。これは『源氏物語』摂取という観点からは、冷泉院に対する光源氏や藤壺中宮の対応を作者が否定的に捉えていたことを示しているとも考えられる。[3]

三の御子に焦点を当てて本物語を読み進めると、特に終盤以降で岩田中将とかざしの君、かざしの姫君と三条少将といった人物がにわかに重要性を増していることがわかる。流罪の身の岩田中将の夢に一条権大納言が現れ、まもなく都に召還されることが示唆されたり、あるいは三条少将は京極三の君の錯乱に居合わせ、京極三の君の出家後も係累として三の御子を支援する人物として物語内で重要な位置を占めるようになる。何よりも用例A傍線部に見られるように、三条少将と岩田中将のみに、三の御子と一条権大納言の容貌が酷似していることに気付く場面が用意されており、この二人が物語の主題に関して特別な役割を担っていることが推測できる。

A・…（三の御子）「母（＝京極三の君）おはしまさば、往かめ」とて手をまさぐりておはす御気配よりはじめ、残る方もなくたとへげもなき人（＝一条権大納言）に似たま

へるかな」と、（三条少将は）不思議におぼす。　（二六五頁）

・（岩田中将は）言づけつつおほけなけれど、春宮の御有様を、あはれにも、いとうるはしうも、見たてまつりたまふに、また、三の御子、よにうつくしうなつかしげにて、かの御気配、いとよく（一条権大納言に）似たまへるを、（岩田中将）「あやしくもおはするかな」と、心一つにかたぶき見たてまつりたまふ。　（二八〇～二八一頁）

ところが、物語中盤までには岩田中将および三条少将が一条権大納言と深い親交を結ぶ様子は示されておらず、[4] 終盤になって唐突に重要性を増していることは物語の構成手法として違和感を感じざるを得ない。

以下に岩田中将とその妻であるかざしの君、および三条少将に関連した物語部分を簡単にまとめておくことにする。母宮が早世したかざしの君は、父按察使大納言に引き取られるものの、父の再婚相手である継母や継母に唆された父によって迫害を受ける。このようなかざしの君の元に岩田中将が通うようになり、恋愛の末結ばれ、女児を出産する（ただし、岩田中将との結婚、女児出産についての記事は本文中には見られず、巻三の冒頭に書かれていたものの、散逸した可能性がある）。[5] そのような状況下、岩田中将の兄、岩田大納言が帝の寵を得ている藤壺女御に恋慕し、懇意にしている女房に懸想文を託すが、それを女房が落としてしまう。懸想文を入手した按察使大納言らは、岩田大納言ではなく弟である岩田中将の手によるものと誣告し、岩田中将は即刻播磨へ流罪となるのであった。残されたかざしの君母娘は、父・継母の迫害を避けるため、宇治でわび住まいをする。岩田中将が配所で長い年月を過ごす間に、三条家の嫡男三条少将が初瀬詣の帰りにかざしの君母娘と出会い、後にかざしの姫君と婚約、時を同じくして岩田中将の赦免が決まり、家族の再会と相成る。

岩田中将とかざしの君に関わる物語について特筆すべき点は、一条権大納言を中心とした物語との関連性が薄く、ほぼ独立した物語となっている点である。塩田公子氏[6]や渕野百合子氏[7]は、これら二つの物語をそれぞれ「権大納言（系）物語」「かざしの君（系）物語」と称している。この名称からも明白であるように、後者はかざしの君を中心としたものであり、継子譚の系譜につらなる物語内容として把握されている。一方で安道（渕野）氏は、むしろ岩田中将を中心として、流罪[8]あるいは夢告という点[9]に着目して物語を捉え直すことを提案している。このように従来は岩田中将・かざしの君物語単独での分析が行われてきたが、その評価は定まっていると言い難く、さらには『夢の通ひ路物語』全体における位置付けについて検証されたことはない。忘れてはいけないことは、この岩田中将・かざしの君物語は一条権大納言が吉野の阿闍梨に託した巻物の中に記載されているという事実である。この巻物は、実は我が子である三の御子に、出生の秘密を克

服してもらうべく、一条権大納言が記したものである。このことを考え合わせると、岩田中将・かざしの君物語の存在意義は、三の御子との関連を無視して語ることはできないはずである。

本稿では、これまでは単なる一挿話として捉えられてきた岩田中将・かざしの君物語が『夢の通ひ路物語』においてどのような意味を有して存在しているのかについて、物語の内容や設定、構造の観点から検討してみたい。なお、一条権大納言に関わる物語群を「一条権大納言物語」、岩田中将・かざしの君に関わる物語群を「岩田中将・かざしの君物語」と称することにする。

一　一条権大納言物語と岩田中将・かざしの君物語との関わり

まず、岩田中将・かざしの君物語に関する先行研究を概観してみよう。これまでは、かざしの君を中心とした「継子譚」として物語を読み解いたり[10]、逆に岩田中将を中心とみなした「濡れ衣、流罪の物語」であるといった解釈[11]が提案されている。このように岩田中将・かざしの君物語の存在意義が曖昧であるのは、主たる物語として展開されている一条権大納言物語にほとんど関わらないからである。安道氏[12]は、一条権大納言物語と岩田中将・かざしの君物語とはほぼ同じ分量であるものの、物語時間や登場人物はほとんど共有されていないことを指摘している。例えばかざしの君について考えてみよう。用例Bに示されるように、母と死別し継母に迫害されているかざしの君についての噂話が語られるという形で何度か話題に挙がるものの、一条権大納言とかざしの君が直接面識を持つ場面が描写されることはない。

B　…（一条権大納言は）例の靱負佐、清さだ召し出でて、うちとけたりし物語に、客人（＝宮の中納言）は、「二人のもとには、いかに面白き筋もあらめ。名残なく語りたまへ」と責めたまへば、…（靱負佐）「…ふるき帝の御女、いかなるよすがにや、按察使の大納言殿の北の方にならせたまひ、女君（＝かざしの君）一人出できさせたまひ、（母宮は）ほどなうはかなくならせたまひけり。その姫君（＝かざしの君）、さべきよすがもなく、もの心細くておはせしかど、まことに御位高き御血筋にて、いふばかりなくかしこう、ものなど習いたまふこともはべらざりしかども、残るかたなう学びたまひ、ことさらうつくしう、らうらうじくましまし君にてはべる」…「…宮（＝母宮）のはかなき夢の様にて消え失せたまふままに、（按察使大納言は）ほどなく異人迎へたまひつるとこそ。…」…「後腹にも、あまた君達生ひ出でたまふほどに、かの姫君（＝かざしの君）はあるかなきかに押し込めたてまつりしと、ほの聞きはべりし」と語れば…

（四五～四六頁）

岩田中将については、吉野の阿闍梨が巻物を読了した後に、播磨に流された岩田中将の夢枕に故一条権大納言が現れる場面が描かれているのだが、それ以前の物語内には、二人の直接のやりとりは一切記されていない。またとりたてて親交があったとの記述もなく、岩田中将の夢への一条権大納言の登場が唐突な印象を与えることは否めない。両物語の関わりを強いて挙げるとしたら、かざしの君の父親である按察使大納言が、後妻腹の娘の婿として一条権大納言を望むが、受け入れられないといったつながりだけである。

一条権大納言物語と岩田中将・かざしの君物語とは、『夢の通ひ路物語』内で並行して進展しており、共通の敵役として按察使大納言が設定されているものの、相互の関連性はほとんどない。それ故にこれまでは岩田中将・かざしの君物語は独立した一挿話として捉えられてきたのであり、その特徴から継子譚あるいは流罪譚といった視点で認識されることが一般的であった。

それでは岩田中将・かざしの君物語を、継子譚あるいは流罪譚であるとして捉えることは果たして妥当といえるのだろうか。次章では、岩田中将・かざしの君物語の内容を吟味することによってその妥当性を検証する。

二　岩田中将・かざしの君物語の特徴―その内容

二・一　岩田中将・かざしの君物語は果たして継子譚であるのか

実母と死別し、継母に迫害されるというかざしの君の生い立ちは、用例**C**傍線部に見られるように典型的な「継子譚」を想起させる書きぶりであるといえよう。

C　まことや、かの宮腹の姫君（＝かざしの君）は、御母宮に後れたまひて、はかばかしう万とりおこなふ御後見もなく、明け暮れ「我が袖は潮干も見えぬ」と、嘆きわびさせたまひ、…されば、按察使の大納言は、また異人あたらしう据ゑたてまつりて、御子どもあまた持ちたまひければ、いまさらの御めで人（＝後妻）の御腹なる人々こそ、もてかしづきたまへ、宮腹の姫君（＝かざしの君）はただ何となう北の方（＝後妻・継母）の讒言にて、（按察使大納言は）自らもうとうもてなしたまひて、押し込めたてまつりたれば、（かざしの君は）万にもの心細く、すずろなること数添へて、悲しきにも、さるは、憂きほどをおぼし知る御齢にねびまさりたまふままに…

（六四頁）

そしてかざしの君に言い寄る男性が絶えぬことを妬む継母が、泥棒にかざしの君を盗ませようと計略をめぐらす場面は、『落窪物語』における典薬助のエピソードに見られるように、

主人公を窮地に陥れる「継子譚」の典型的な趣向であるとの指摘[13]もある。確かにかざしの君の生い立ち、継母による質の悪い奸計や迫害、理想的な配偶者（岩田中将）の出現および子宝（女児）に恵まれるという物語展開は、従来通りの「継子譚」の形である[14]といえるのだが、実はこのような内容が描かれているのは岩田中将・かざしの君物語の冒頭のほんの僅かな部分でしかない。多くの紙面が割かれているのは、懸想文事件によって岩田中将が播磨へ流されて以降の話である。つまり岩田中将・かざしの君物語においては、継子譚としての要素は単に物語の導入として機能しているのであり、かざしの君に降りかかる主たる不幸は「継子いじめ」によってもたらされるわけではないのである。岩田中将の流罪によってかざしの君母娘は一度は按察使大納言邸に帰るが、相も変わらぬ父と継母の迫害に耐えかね、故母宮が住んでいた宇治へと移り住むことになる。以後八年間、第二の救世主たる三条少将が登場するまで、かざしの君母娘は宇治で暮らす。この部分においてはもはや按察使大納言夫婦によるかざしの君への継子いじめは機能しておらず、用例D傍線部に見られるように岩田中将に着せられた濡れ衣こそがかざしの君の不幸の根源として機能しているのである。

D・さても、かざしの君は、姫君（＝かざしの姫君）うち具して、またもかなしきふるさと（＝按察使大納言邸）に帰らせたまふ。古よりも身の憂きことにうち添へて、今ひとしほおぼし乱れたまへるならんかし。一日二日だにめやすからぬ御あたりに、ましていつを限らぬ御住まひ、もの苦しう、さすがに人のもの言ひもさがなう、暮らしかねつつ嘆きおはす。（一〇〇頁）

・（かざしの君）「さても、よにつらきことども数過ぐしぬれど、かう都離れあさましき（宇治の）住まひに、この若君（＝かざしの姫君）をしも生ふし立てなんとは思はざりしを」と、耐へやらぬことにうち添へつつ、涙がちにて覆ふばかりの袖もあらねば…（一〇五頁）

また、『落窪物語』『住吉物語』のような典型的な継子譚との相違点としては、いじめていた張本人である按察使大納言夫婦に対する報復が物語の中で描かれていない点を指摘することができよう。岩田中将が罪を許されて帰還し、かざしの姫君が三条少将と婚約するという「継子いじめを克服した幸福」に対して、按察使大納言夫婦の心情を描くことが典型的な継子譚の物語展開である。しかしかざしの君が幸福を得た後に按察使大納言夫婦はもはや登場せず、「継子いじめ」という負の行為の清算はなされないままとなってしまっている。これらのことから、岩田中将・かざしの君物語において採用されている「継子いじめ」は、あくまで導入における一設定にすぎず、物語全体を支配する因子とはなり得ていないと解釈することができる。

二・二　流罪の持つ意義について

岩田中将・かざしの君物語における障碍要素としては、継子譚よりも岩田中将の流罪の方がより強く機能しているわけだが、それではこの流罪あるいは濡れ衣といった要素は岩田中将・かざしの君物語を支配する主題となり得ているのであろうか。岩田中将の流罪は『源氏物語』の須磨・明石巻、あるいは『松陰中納言物語』における山の井中納言たちによる陰謀、松陰中納言の隠岐への流罪との共通点が多く、これらを強く想起させる内容となっている。その一方で岩田中将の流罪の描写は『源氏物語』や『松陰中納言物語』におけるそれらとは異質な、不自然ともいえる部分を多数有しているのである。以下に詳述する。

まず、岩田中将が流罪に至る経緯を確認しておく。兄である岩田大納言が藤壺女御に宛てた懸想文を懇意にしている女房に託すが、彼女は慌ただしさに紛れて落としてしまう。それを按察使大納言の娘であり、帝の寵妃の一人である麗景殿女御が拾い、父按察使大納言に見せる。按察使大納言は筆跡より手紙の主を「岩田中将」であると断じ、麗景殿女御ともども帝にその旨を奏上する。それを受けて帝は即刻播磨への流罪を岩田中将に命じるという流れである。最初に浮かぶ疑問としては、按察使大納言が懸想文の犯人として無実である岩田中将を指摘したことは、単なる誤解なのかそれとも意図的なものであるのかという点である。単に思い違いをした可能性もあろうが、按察使大納言物語および岩田中将・かざしの君物語双方を通じて敵役の立場にいることを踏まえると、意図的に悪意をもって岩田中将を陥れたとの解釈が適当であろう。用例E傍線部に見られるように按察使大納言は、かざしの君が岩田中将との間に子をなしたことを外聞が悪いと認めておらず、さらにはかざしの君に対して後妻とともに継子いじめを働いていること（前掲用例C傍線部）から、岩田中将に対しても「継子いじめ」の延長として悪意を持っていた可能性がある。[15]

E　…（かざしの君の乳母たちが）しかしかの御こと（＝かざしの君の懐妊）ども聞こえたてまつれば、（按察使大納言は）御目も大きになりて、『「さることあり」』とも知らで過ぐしにけん怠り、さこそ外様の聞き耳もうるさく、かつは人の行く末もおぼつかなきぞかし。あやまちあるべき際しも、親なん思ひ定め扱ひたまへらんには、外聞きもうとからじ。『さるべきもの』と、緩いつる怠り心なりけり。軽らかなる身かは」とばかりのたまひつつ、御気色おどろしく、興なげに出でたまへば…

（七一～七二頁）

しかし、按察使大納言と岩田中将とが直接にやりとりをする場面は本文中には一切描写されていない上に、按察使大納言が岩田中将を陥れることに明快な理由を見出せない。ある

いは岩田中将が、「日頃心うつくしう思ほしめされしに」（九三頁）、「誰よりか先こそ御おぼえあらんを」（一九四頁）と帝に寵愛された人物であることから、按察使大納言が敵視していた可能性もある。しかし、これもまたそのことを連想させる記述は物語内に見られない。本物語の曖昧な描写からは、「無実の罪」という主題を深く表現しようとする意図を読み取ることはできないのである。

例えば、同じように流罪となる人物として光源氏や松陰中納言がいる。光源氏の須磨への流離は、尚侍であった朧月夜の君との密会の場を右大臣に見つけられ、激怒した右大臣と弘徽殿大后がこれを期に光源氏を政界から追放しようと画策したことが一因である。桐壺更衣に桐壺帝の寵愛を奪われた弘徽殿大后が、更衣の死後も忘れ形見である光源氏への憎悪の念を絶えず抱いていること、桐壺院崩御後、右大臣や弘徽殿大后による圧迫が強まり、光源氏や藤壺方の人々の昇進は阻まれていくといった政治的背景が『源氏物語』には一貫して描写されている。それ故に光源氏の須磨流離は説得力のある事象として読者の眼前に現れ得るのであり、光源氏の境遇に対する共感と、右大臣や弘徽殿大后に対する反感を強く誘うのである。

『松陰中納言物語』においても[16]、山の井中納言によって帝の御妻である麗景殿女御に宛てた偽の懸想文がねつ造され、主人公の松陰中納言は無実の罪により隠岐に流されることになる。巻一「山の井」では山の井中納言が藤内侍に恋情を抱いていることが、次の「藤の宴」では松陰中納言も同じく藤内侍に好意を持っていることが語られ、結局行幸の折の帝のおぼえめでたい松陰中納言に、藤内侍が下賜される。山の井中納言が危険を冒してまで偽文をねつ造し、松陰中納言を陥れようとした原因は何か。それは恋する藤内侍を松陰中納言に奪われ、藤内侍に宛てた自らの懸想文を松陰中納言が一笑したことへの恨みが原動力となっているのである。このように、『源氏物語』や『松陰中納言物語』では、主人公の流罪に至る原因が物語内に伏線としてきちんと描写されており、読者に敵役の意図を明確に示すことによって、流される人物への感情移入を誘起しているのである。これに対し、岩田中将・かざしの君物語においては、岩田中将が流罪となるべき背景の記述が十分とはいえず、読者は按察使大納言に反感を持てばよいのか、それとも岩田中将の不運な身の上に同情すればよいのかわからない中途半端な状態に置かれることになる。このことは、逆説的ではあるが岩田中将・かざしの君物語が、岩田中将の「無実の罪」を主題として描かれた物語ではないことを示唆しているといえよう。

それ故であろうか、岩田中将の流罪に対して物語内の登場人物たちの意見が描かれることもない。本文中に確認できるものは、以下の用例Fに挙げた流罪決定の詔を岩田中将に伝達する右大臣（一条権大納言の父）の心情のみであるのだが、

岩田中将の流罪に対する思いというよりも、即位後間もない時期に帝が流罪の決定を下したことを残念に思うというだけの感想である。[17]

F　大臣（＝右大臣）にも、かく（＝岩田中将の播磨流罪）仰せ言はべりければ、御位定まらせたまひ、いと幾日頃もあらぬ御ほどにて、うたておぼゆれど、「名残なくとのひぬる上は」と、力なうおぼいたまへながら、御宿直にさぶらいたまひし中将（＝岩田中将）召し出でつつ、のたまひつけたまふ。（九四頁）

他の人物を含めても、岩田中将が犯人であることや、播磨への流罪が妥当であるかどうかを判断することのできる心情は描かれておらず、人々が岩田中将に同情的であったかどうかすら不明である。唯一の例外は、岩田中将を播磨へ送り届けた「これつぐ」という人物が、岩田中将の立派な態度を見て「さがなき人の讒言にや」（九五頁）と、岩田中将の処遇に疑問を抱くのであるが、これとて事情や岩田中将の人となりを熟知した人の感想ではない。

岩田中将の流罪を聞き、兄岩田大納言は罪の意識に苛まれ、弟の身の潔白を訴えて自害をする。ところが、按察使大納言の「かばかり奏したてまつらむは、いと心やましきことさぶらへど、同じうは、け遠き方（＝岩田中将）にても、さるよしやはべらめ」（九九頁）という言が採用されて、岩田中将の行為について再審議されることもない。また、岩田中将が赦免されるきっかけになったのは、「嘆くこともさぶらはねど、心から沈みし人（＝岩田中将）のことのみ、さらに忘れんとするにまぎれず、あさましうわづらはしうなんはべる」（一七六頁）と、病床の后の宮が弟岩田中将の行く末を気に掛ける姿に帝が同情したことによるのであり、濡れ衣が晴らされたわけではないのである。その後物語の末尾に至るまで、岩田中将が無実であったことについて語られることは一切ない。岩田中将の夢に現れた故一条権大納言や妻であるかざしの君ですら、岩田中将が無実であるかどうかについては一切言及していないのである。

『松陰中納言物語』では、山の井中納言の悪巧みが春宮によって徐々に暴かれてゆく過程が巻三「むもれ水」「文あはせ」で語られ、松陰中納言の無実が明らかとなる。そして松陰中納言は京へ召還され、反対に彼を陥れた山の井たちは、審議の結果官位を下げられ事実上地方へ左遷させられている。このように、『松陰中納言物語』では松陰中納言の無実の罪による流罪、濡れ衣を晴らすことを目的に物語は構築されているのだが、これに比べ岩田中将の場合は赦免となった後までも、無実であったこと、濡れ衣であったことは物語内の登場人物には明らかにされない。極論すれば、岩田中将・かざしの君物語においては、仮に岩田中将が真犯人であったとしても、物語展開に支障が現れることはないのである。そのため、この物語を「無実の罪による流罪」譚として捉えた場合

には、そのモチーフを活かしきれず、収束していない中途半端なものとなってしまう。そもそも岩田中将は無実の罪であることを声高に主張したりすることはなく、むしろ用例Gに見られるように単に妻子との別れを悲しみ、絶えず気に掛けるのである。

G・（岩田中将）「…げに忘られがたき撫子（＝かざしの姫君）の、何心なく、引きとどめ、常よりはまつはれしを、『今帰り来ん』と慰めし一言も、終の形見とこそなりにけれ。…」…（九五頁）

・…（岩田中将）「かざしの君のいかばかりたづきなく、世の中の救ひがたく、身をも失せまほしくおぼすらめ。ことに幼き人（＝かざしの姫君）をしも、なみなみにも生ふしたてたまふまじ」と、…来し方行く末までもおぼしやりつつ、…（九六頁）

このことからも、無実の罪により岩田中将が流罪に処せられることに作者は重きを置いて描写したのではなく、本人には責任がない思いがけない出来事によって妻子と引き裂かれる事態を導くための方便として「流罪」を使用したものと考えられる。これは最初に述べた「継子譚」についても同様であった。岩田中将・かざしの君物語における「継子譚」「無実の罪による流罪」という要素は、いずれも物語の背景あるいは障碍の理由としてのみ物語に取り込まれているのであり、最終的に「継子譚」「無実の罪による流罪」という題材に相応しい形での収束をみせてはいない。すなわち、それらがこの物語の主題として機能しているわけではないと結論付けることができよう。岩田中将・かざしの君物語が、単独の物語として明確な主題を持っていないという事実は、これを単なる一挿話として捉えることが正しい評価とはいえず、『夢の通ひ路物語』全体の中での位置付けを見出した上で、その意義を再確認する必要があることを示唆しているのである。そして、ここでいう『夢の通ひ路物語』全体とは、一条権大納言と京極三の君との悲恋を指すのではなく、巻物を委託する行為を経由した三の御子の出生の秘密という主題に他ならない。

三　岩田中将・かざしの君物語の特徴―その構成

次に、岩田中将・かざしの君物語の構成について検討してみる。この物語は起承転結がはっきりとした単純な内容であり、一条権大納言物語とは明確に区別できる形で巻一から巻六までの八箇所に点在して記述されている。点在している岩田中将・かざしの君物語の各断片冒頭表現を抜き出すと以下のようになる。[18]

①まことや、中将殿（＝一条権大納言）は、その頃、（京極三の君との）文の通ひも絶え間にて、一人ものをおぼしつつ、何ごとも御身に染まぬ心にて、わづらはしうしたまふを…（京極三の君への思いに苦悩している一条権大納言

の元に宮の中納言たちが来訪し、かざしの君の噂をする。詳細は用例B参照）　（四三頁）

②まことや、かの宮腹の姫君（＝かざしの君）は、御母宮に後れたまひて、はかばかしう万とりおこなふ御後見もなく、…　（六四頁）

③その頃、岩田の大納言、女御（＝藤壺女御）の御様をいとたぐひなうおぼし乱れて…　（九二頁）

④まことや、かの故大納言（＝岩田大納言）のよにあさましき様（＝自害）にて失せたまへる後…　（一三七頁）

⑤男君（＝一条権大納言）は、かう引き違へつつ、あらぬあたりのつれづれとながめたまふらんほど、おぼしやりつつ、我が御方に臥したまふままに…　（一七七頁）

⑥まことに、かの按察使の大納言、秋の司召に大将かけたまいぬ。　（一九一頁）

⑦まことや、三条の侍従の君（＝三条少将）、この春の直物に少将したまへり。　（二五二頁）

⑧まことや、后の宮、いつとなく悩みわたらせたまひて、年経りしに…　（二七五頁）

八例の断片中、五例が「まことや」で始まっている。①での「まことや」は、直後に岩田中将・かざしの君物語が語られるわけではないが、京極三の君への恋情に思い悩む一条権大納言の元に宮の中納言たちが集まり、始めた女性談義の最初に「かざしの君の噂話」が描写されていることを踏まえると、この断片の冒頭表現を「まことや」と捉えてよいと思われる。また⑥については、「まことに」と表記されてはいるものの、用法的には明らかに接続詞として用いられており、他の「まことや」のケースと同一とみなすことができよう。

『夢の通ひ路物語』全編で使用されている「まことや」は十一例であることから、全てではないにしろ、これらの語が岩田中将・かざしの君物語の開始時に集中的に採用されていることがわかる。中野幸一氏[19]は、地の文の「まことや」は、叙述が一段落し、やや筆を改めて別の事柄を書き出そうとする時に見られる草子地であると指摘している。また小林美和子氏[20]によれば、「まことや」は複線型叙述を整理しながら、主流・傍流の位置関係をも明確化する機能を有しており、双方の指摘を踏まえると「まことや」という言葉によって分離された一条権大納言物語と岩田中将・かざしの君物語とはやはり互いに関連性の薄い、別個の物語であると捉えることは妥当であろう。事実、点在する岩田中将・かざしの君物語を全て削除したとしても、一条権大納言物語はその前後で特に違和感なく接続され、その展開に齟齬が生じることはない。

上記八例の岩田中将・かざしの君物語の断片のうち、①⑤では岩田中将あるいはかざしの君は直接的には登場しておらず、一条権大納言と宮の中納言がかざしの君の噂話をする場面となっている。また④においても岩田中将・かざしの君は登場せず、岩田大納言の未亡人と宮の中納言とのやりとりが

描写されているのみである。②③⑥⑦は岩田中将およびかざしの君の場面であるが、逆に一条権大納言は登場せず、残った⑧では既に故人となった一条権大納言が流謫中の岩田中将の夢に現れる場面が描かれ、ここにおいて初めて（一条権大納言は霊ということになるが）両者は相まみえることになる。なお、⑦は三条少将とかざしの姫君の恋愛譚に相当しており、ここには一条権大納言も岩田中将も登場していない。このようにしてみると一条権大納言は、岩田中将・かざしの君物語に登場する人物とは不自然なほどに接触をしていないことが見て取れる。ところが、岩田中将および三条少将は物語終盤において三の御子との関わりにおいて重要な役割を担っており、むしろ一条権大納言と近しい間柄と設定した方が物語設定上好都合であると考えられる。

これらの分析を踏まえて、ここで『夢の通ひ路物語』の成立についての疑問を呈示しておきたい。明確に分離可能であり、物語展開の上からも相関のほとんどない一条権大納言物語と岩田中将・かざしの君物語とは、同時期に現在の構成のような形で執筆されたのであろうか。一つの可能性として、岩田中将・かざしの君物語は、元々存在していだ一条権大納言物語の所々に後記・挿入された[21]と想像してみよう。その場合、吉野の阿闍梨が巻物を読むという形式や、巻物外部の序・後日談の部分もまた、岩田中将・かざしの君物語と同時に追加されたと解釈すると、これまでに指摘してきた数々の不自然な点や、物語構成を比較的矛盾なく説明できるのである。すなわち、元々は単純な悲恋物語として存在していた、あるいは書き始められていた一条権大納言物語を拡張するような形で巻物という形式を採用して、一条権大納言没後の三の御子を主とした物語を展開し、その際に必要となった人物群を岩田中将・かざしの君物語の登場人物として一条権大納言物語に分割挿入したという可能性を指摘してみたい。

岩田中将・かざしの君物語が後記・挿入された可能性については、かざしの君の生い立ちについての描写にもその兆候が見られる。本物語にかざしの君が登場すると、その生い立ちとして母宮と按察使大納言との出会い、結婚、そしてかざしの君の誕生後の母宮の死、父按察使大納言の再婚、再婚相手である継母・父からの迫害といった内容が①の部分において前掲用例Bのように語られるのだが、その後ほぼ同内容の記述が②③⑦の計四回も繰り返し語られる。これは、主たる一条権大納言物語の中に点在している岩田中将・かざしの君物語において、その設定が散漫になってしまうことを恐れるが故にあえて繰り返し記述したものと想像できる。実際には、継子いじめという設定は印象に残りやすく、何度も繰り返すまでもないのであるが、あるいは後記・挿入したという不安感からか、必要以上に岩田中将・かざしの君物語を強調しようという姿勢を見て取ることができる。

次に、一条権大納言物語以外の部分が後記・挿入されたと

いう仮説に基づいて岩田中将・かざしの君物語の内容を再検討してみよう。

四　岩田中将・かざしの君物語から『夢の通ひ路物語』への寄与

一条権大納言と、岩田中将・かざしの君物語の登場人物との唯一の直接的な接触が、播磨に流された岩田中将の夢枕に故一条権大納言の霊が現れ、赦免が近いことを告げる場面である。この場面は、『源氏物語』明石巻において光源氏の夢枕に立った桐壺院の場面を摂取しているとの指摘[22]がある。そうであるならば、一条権大納言は岩田中将の身の上になみなみならぬ関心と同情を寄せていることになり、あるいは桐壺院のように赦免が行われるように何らかの働きかけを行った可能性も考えられる[23]。ところが一条権大納言が、岩田中将にそこまでの厚意を示す理由は、本文内には一切示されてはいない。

以前に本物語の構造に着目し、その主題について論じたことがあるが[24]、一条権大納言の没後の部分は、「序」でも強調されていたように、「三の御子のその後」を描写しようとしたものである。岩田中将は帰還後、三条右大臣の援助を受けて復官し、また娘のかざしの姫君と三条少将との婚約もあって栄華を極める。塩田氏[25]は岩田中将家の将来を「岩田中将の都帰りは、かざしの君母娘の不遇に終止符を打ち、かざしの姫君と梅壺女御の甥に当たる三条中将の結婚を成立させることになる。おそらく将来的に、その間に后がねの姫君の誕生を予見することが出来よう」と論じている。つまり岩田中将は、かざしの姫君と三条少将との結婚を通して三条家と繋がり、三の御子の後見の一人となる可能性を有しており、一条権大納言が岩田中将の夢に登場したのも、そのための伏線であるとの解釈が可能である。

巻一冒頭以降登場することのなかった三条少将が一条権大納言の没後に突如として再登場してくることも同じような理由によるものであろう。そもそも三条少将は、岩田中将以上に一条権大納言との接点が見られないのだが、三条家そのものは三の御子の母である京極三の君（梅壺女御）との関係が濃厚である。京極三の君は父親不在であるため、姉の嫁ぎ先である三条家を後ろ盾に入内しており、三の御子出産の折も三条家に里下がりしている。そして京極三の君の出家後には三の御子のための里居御殿を建設していることからも、三条家は京極三の君のみならず三の御子の後見者であることが窺える。このような三条家の嫡男という設定に加えて、再登場とともに偶然に宇治に住むかざしの君母娘と対面し、二人を援助することになり、やがてはかざしの姫君と婚約するに至るという物語展開から、岩田家と一丸となって三の御子を援助する人物として設定されていることを確認できる。

このように岩田中将および三条少将は、三の御子と接触・

関連すべき人物として設定されており、そのことが岩田中将・かざしの君物語の展開に影響を与えている。極論するならば、三の御子と接触することを前提として岩田中将・かざしの君物語が用意されていると考えることができる。ここで改めて、岩田中将・かざしの君物語を通じて描出される岩田中将という人物について考えてみよう。

四・一　岩田中将と一条権大納言の同質性

二章において岩田中将・かざしの君物語は、「無実の罪による流罪」や「継子譚」ではなく、思いがけない出来事によって妻子と引き裂かれるという事象に力点を置いて描写されていることを指摘したが、一条権大納言物語でもまた京極三の君の入内という意外な出来事によって二人の関係が壊れてしまっており、状況は近似している。以下、詳細を検討する。

藤壺女御の死に著しく落胆した帝が、藤壺女御に似通う京極三の君の入内を切望したことから、一条権大納言と京極三の君の恋愛は破局へと向かう。帝の意向を聞いた京極三の君の母入道宮は、他の女御たちの嫉妬によって亡くなった藤壺女御の二の舞になることを懸念し、入内を渋るのだが、義兄三条右大臣は故京極大納言の遺志を強調して入内を即断してしまう。丁度その折は一条権大納言の訪れも途絶えていたこともあり、彼が事情を知らぬ間に京極三の君は入内する。結局一条権大納言が京極三の君の入内を知るのは、京極三の君の兄である京極中納言との会話を通してであった。帝は一条権大納言と京極三の君の関係を全く把握しておらず、意図的に関係を引き裂いたわけではない。偶然にしろ二人の仲を引き裂いた帝に対して、一条権大納言は恨みの感情を抱いていないことは、実は我が子である三の御子のことを「おほけなき筋」（二二六頁）と表現している点、自らの病気平癒のために帝たちが尽力していることを「よに恐ろしうもかたじけなうも色々におぼし乱れては」（二二六頁）と恐縮していることから確認でき、むしろ帝への後ろめたい気持ちを感じていると判断できる。

岩田中将の場合も、按察使大納言たちの讒言により、身に覚えのない「帝の御妻をあやまつ」という罪を着せられ、かざしの君たちに一目会うこともなく播磨に流されている。無実の罪であるのだから、当然やり場のない恨みがましい感情が湧き起こるであろうはずが、用例H傍線部のように岩田中将は兄が懸想文事件の当事者であることを知りつつも、その罪を被るのであった。

H　（岩田中将）「…まろはさばかり清うても、またいとほしき（兄岩田大納言の）御ためを思へば、一人沈むぞ、げにまさりけり。幼きほどにて、さるべき人々にふり捨てられたてまつりしかば、この上（＝岩田大納言）は父と思ひ、宮（＝后の宮）はおほけなけれど母と思ひて、朝

夕べに仕うまつるにも、『しばしだにおぞげにやおぼさん』と、心のたゆみなく、『色をよくして、うとまれたてまつらじ』と、危うきことに思ふものから、『及ばねど行く末長く孝を尽くしたてまつらん』と、心を立てし甲斐ありて、御代はりにかう沈みつるこそ、せめては罪軽き心地すれ」…　（九七頁）

そして、「かたじけなき御影を恨みむ心はつゆもあらず。また誰をかかこたむ。幸あらでかくためしなき名の汚れつつ、日頃心高う思ひわたりつつ、『君をも身をもかしこきたぐひになさめ』とのみ思ひしも、いたづらにのみなりゆきしこそ悲しけれ」（九六～九七頁）と、忠を尽くせなかった自らの身を嘆き、帝に対して恨む感情は見られない。

岩田中将が無実の罪で流罪となり、かざしの君と引き離されるという状況設定は、一条権大納言と京極三の君とが入内という外的要因によって引き裂かれる部分に近似している。どちらの要因も男君の知らないところで発生しており、男君には回避する術がなかったのである。そして、二組の離別を最終的にもたらす人物が、帝である点においても共通性を持つ。一条権大納言と岩田中将の二人の共通点のうちで最たるものは、ともにこの不本意な離別に対して憤りや恨みの感情を抱くことなく、離別に関わる秘密を最後まで隠し通した点である。ここでいう秘密とは、一条権大納言においては京極三の君との関係であり、さらには入内後に誕生した三の御子の出生である。京極三の君は、「御子（＝三の御子）は、この頃いと清らに肥えおよすけたまふさま、今よりなまめかしう、御眉の匂ひやかに恥づかしげなるほど、ただか（＝一条権大納言）の御気配を写し取りたる様にて、うつくしきも、恐ろしう…」（二一四頁）、「（三の御子の）顔つきのいとまがふべくもあらず、あやしきまで（一条権大納言に）似たまへるを、『かしこき御目に御覧じつけやせん』と、空恐ろしう、身も凍むるやうにおぼしめす」（二五一頁）に表れているように、三の御子と一条権大納言の容貌が似通っていることをきっかけとして、二人の関係が帝に露顕することを特に恐れ、苦悩している。それ故に用例Ｉのように、一条権大納言は三の御子誕生に対して、罪の意識を感じ（波線部）、京極三の君への恋愛感情を抑制する（傍線部）のである。

Ｉ　「誠にかばかりならでも、あはれおぼし出づまじき身かは。古より結びおきつる我が罪故」と、思ひ返せど、恨めしう、何はにつけて、かのおほけなき一節（＝三の御子のこと）のみ、避りどころなく、げに露けさ添ひて悩ましうおぼし嘆きては…「ただこの『もろともに（＝京極三の君の返歌）』とのみを、生ける限りの思ひ出でにてや止みなん」と、いとどしくうちながめ、音をのみ泣きて…　（二二五頁）

そして「なからむ後ろには、とあれ少し人（＝京極三の君）の御ためもめやすからめ。おのづからこの御心どもにも、あ

りありてのさて後こそ、心憂きことは知らせたまはめ。さる世にめぐらへて御おもてぶせならんよりは」とおぼす。「さりとて、この名あらはに、すすぎ果つまじき身なりけり」と、御心一つなる筋を、今世に漏れぬる様に、やすからぬ思ひをしたまふ」（二二六～二二七頁）と、自らが生き長らえることは、三の御子の出生の秘密が露顕する可能性があると懸念しつつ、悶死するのである。入内を強硬に執り行った三条右大臣や帝に対して、恨みがましい気持ちを持つことは一切示されることはなかった。

岩田中将の場合には、懸想文事件の当事者は兄岩田大納言であることに気付いた上で、兄に対する孝養心から身代わりとなって罪を被っている（用例H参照）。こちらも兄に対してはもとより、讒言を行った按察使大納言に対してすら恨みを持つことはない。一条権大納言および岩田中将が有するこれらの秘密は、決して表沙汰にすることのできないものであるが故に、両者ともそれをひたすら隠し通すことになる。自らの境遇に対しての不満、あるいは張本人に対する恨みの気持ちがわずかでもあれば、これらの秘密を保持することは困難であっただろう。もっとも、一条権大納言の場合には、京極三の君の入内そして三の御子の出生の秘密は、ひとたび事態が進展した以上、もはや取り返しのつかないものであり、結局一条権大納言は悶死するしかなかったのに対して、岩田中将の場合は、濡れ衣が晴れることはなかったものの、赦免されて都に帰還し、その後栄達を遂げるという点において、両者は異なった結末に至っているといえる。

以上のことから一条権大納言と岩田中将は、細かい設定に違いはあるものの、人物設定や降りかかった障碍、それに対する当人の対応といった面で、特に明確な差異を見出すことはできず、非常に類似した人物設定となっていることがわかる。通常、物語技法としては二人の対照的な人物が対立・葛藤し合うように人物設定されることが多い。例えば『源氏物語』では光源氏と頭中将、薫と匂宮、『石清水物語』では伊予守と秋の中納言などであり、主人公が所有しない性質や設定を有するもう一人の人物との差異・対立を示すことによって、物語の主張の明確化を図っている。それに対して『夢の通ひ路物語』は、従来の物語のように対照的な人物を設定するのではなく、同質の人物二人を主人公として設定している点において特異な物語であるといえよう。両者の行いに取り立てて差異が見られないにもかかわらず、かたや一条権大納言は悲劇的な結末を迎え、岩田中将はひとたび失いかけた幸福を掴み得ている。人物設定、人となり、そして外的要因の面で一条権大納言と酷似している岩田中将は、極論するならば「幸福を掴み得たと仮定した場合の一条権大納言」の姿に他ならない。

それでは同質の二人に異なった結末を用意している本物語の意図はどこにあるのであろうか。岩田中将・かざしの君物

語が後記・挿入されたと考えると、このような岩田中将という人物を新たに登場させ、別個の物語を描くに至った理由が存在するはずである。そしてその理由は三の御子の存在に帰着することができよう。すなわち、岩田中将の人生あるいは物語展開は、一条権大納言が三の御子に対して示そうとしたもの、期待するものとなっていると考えられるのである。

四・二　岩田中将と三の御子の同質性

三の御子も、自らの与り知らぬところで出生の秘密―帝の子ではなく、一条権大納言と京極三の君との間の子であるということ―を背負うこととなった人物である。後の春宮にと帝が寵愛したことに対して、一条権大納言と京極三の君は悩み抜き、やがて一条権大納言は悶死、京極三の君も出家することになる。その後、一条権大納言が三の御子を救済する手段として選んだのが、自分と京極三の君、さらには岩田中将とかざしの君の人生を描いた巻物を三の御子に見せるということであった。一条権大納言物語部分については、三の御子の出生の秘密を明らかにするという目的によると考えられる。それでは、岩田中将・かざしの君物語が巻物に含まれなければならない理由は果たして何であろうか。

一つには、三の御子の後見的存在となるべき岩田中将を三の御子に知らしめるという役割が考えられるが、それ以上に一条権大納言が、外的要因によってもたらされた不幸な境遇に対する処方として、岩田中将の生き方を三の御子に示しておきたいと考えたからではないだろうか。三の御子が背負った出生の秘密は決して明らかにすることができないものである。吉野の阿闍梨から巻物を渡され、一時は出家を望む三の御子であったが、やがて自らの立場を受け入れ一人の御子として生きてゆく道を選ぶことになる。[26] このような生き方は、岩田中将が無実の罪で流罪となりながらも、その真実を押し隠したまま与えられた境遇に耐え、やがては復権・栄華に至るという岩田中将・かざしの君物語のそれを手本としたものとなっているのではないだろうか。特に岩田中将に関しては、用例J傍線部に見られるように、無実の罪で流罪となったにもかかわらず、信仰心を忘れずに誠実かつ真摯な生活を送り続けたことを住吉神に嘉されている。自らの与り知らぬ外的要因によって科せられた困難に対するこのような態度こそが、一条権大納言が三の御子に、そして作者が読者に対して示したかったものであろう。

J　…吉松（＝住吉神）はうち笑みつつ、「まろ、今まで人とのみ見えまぎれて、これにはべりし。（岩田中将が）このところ（＝播磨）に移りおはすべき頃よりも、しばし御心におぼえなきことに沈みたまふべき、前の世に結びたまひしことありて、憂かりし月日は過ぐしたまへど、げに、ことなくまさしくまろに仕うまつること久し。しかるのみか、兄人（＝岩田大納言）の罪（＝懸想文事件のこ

と)、さりげなく身にまかせ、人げなき恥に代へしこと、さらに何ごとにかたちも並べん。されば、志をまろいたく感じて、かうためしきなき所に影は隠しぬ。なほ心清らになして、さる君達に行く末長く見えたてまつりたまふ。京にても人の心になほ我入りなん」とて消ちたる様に失せたまひて、空を行く。　(二七八頁)

三の御子の将来が物語内で語られることはないが、一条権大納言は不本意な環境に置かれた際の生き方の手本として岩田中将の生き様を呈示し、三の御子もそれを受け入れたからこそ出家を思い止まったと考えられるのである。

四・三　岩田中将の人物設定と後記・挿入問題

『夢の通ひ路物語』の真の主題といえる三の御子の出生の秘密とその克服に関しては、とりわけ岩田中将の物語が重要な役割を果たしていることがわかった。ところが、一章で述べたように岩田中将・かざしの君物語と一条権大納言物語とは関連性が非常に薄く、一見して岩田中将がそのように重要な役割を持った人物とは認識できない。もし岩田中将・かざしの君物語が後記・挿入ではなく作品成立当初から現在のような構造の物語であったとしたならば、岩田中将は例えば宮の中納言のように物語冒頭から全編にわたって登場すべきではないだろうか。この宮の中納言は、「もろともに隔てなく年頃馴れむつぶ御仲」(一七七頁)と、一条権大納言が何ごとも分け隔てなく語り合える親友として設定され、彼が亡くなる際には後事を託された人物である。また、一条権大納言が女二宮と結婚した翌朝に訪れた宮の中納言は、彼が意気消沈している様子を見て、女二宮に興ざめしたのではないかと同情したり、病により弱りゆく一条権大納言が人には言えない重大な悩みを心に秘めていることを察知し、用例Kのように自分に告白してくれるように勧めたりと、一条権大納言にとっては唯一の理解者であったはずである。

K　…(宮の中納言)「『後れ先立つ隔てなく』とのみ、日頃契りはべりしかど、またそのほどうち捨てられたてまつらんは、いといみじうも恨めしうも思ひまどふべきを。(一条権大納言が)おぼし籠めなんことは、なほ残さでも、もろともにこそ聞こえあきらめさぶらはめ。されば、かく日を経て悩ませたまひ、中頃いささかまぎれたまへる様に、誰も喜び見たてまつりしに、またうち返し重らせたまひまされば、いと心憂く、親同胞などのことはさらにおぼえぬことにて、さらに身をもかへまほしく嘆きたてまつる。などか、おぼさんことなどつゆもはべらば、御心おかでのたまひね」など、いと思ほし乱れて、うち泣きつつ聞こえたまへば…　(二三二頁)

ところが宮の中納言は、吉野の阿闍梨が巻物を読了した後にはほとんど物語に登場せず、三の御子とも接触することはない。そればかりか、一条権大納言は吉野の阿闍梨に巻物を

託す際に、「むつましき限りあまたさぶらふ様なれど、君（＝吉野の阿闍梨）ならでは聞こえ承るべき方、はた思ほえさぶらはねば、かう見せたてまつる」（一三頁）と、「あなた以外には託せる相手はいない」と、ことさら宮の中納言を無視するような発言をしているのである。このように巻物内部の一条権大納言物語とそれ以外の部分とでは、宮の中納言に関する設定が首尾一貫しているとはいえず、物語終盤では宮の中納言の存在意義および登場機会が激減している。その一方で岩田中将や三条少将といった人物がにわかに重要性を持ってきており、巻物読了後の部分は一条権大納言物語とは異なった設定の下で異なった主題を表現しようとしていると考えられ、これは異なった時期に成立したという仮説を支持するものであろう。すなわち、元々存在していた一条権大納言物語という悲恋物語を題材として、出生の秘密を持つ三の御子に着目した後日談を追記するにあたり、出生の秘密を克服するための処方としての岩田中将の物語を新たに追加し、一条権大納言物語の各所に「まことや」といった話題転換のことばを伴ってわかりやすく分散配置したと推測することができる。結果的に、岩田中将や三条少将が一条権大納言物語にほとんど登場しなかったり、あるいは逆に全編にわたって登場していた宮の中納言が突如その存在意義を失ってしまったりといった不自然な点が物語に残ってしまったのであろう。

おわりに

以上、従来『夢の通ひ路物語』における独立した一挿話として捉えられきた岩田中将・かざしの君物語を、その内容および物語構成に着目して分析した。その結果、「継子いじめ」あるいは「濡れ衣による流罪」といった、数々の物語作品において主題となってきた構図が導入されているものの、最終的にそれらが話型の通りに収束することはなく、単独の挿話としての意味合いは薄いことがわかった。岩田中将・かざしの君物語は『夢の通ひ路物語』の本文中の八箇所に分割配置されており、それぞれの冒頭部に物語の転換を表す「まことや」が多用されている点や、同じ設定が何度も繰り返し語られている点から、後記・挿入された可能性があることを指摘した。

同様の兆候は、物語の内容においても散見される。吉野の阿闍梨が巻物を読了した後、『夢の通ひ路物語』の真の主題といえる三の御子の出生の秘密については三条少将や岩田中将が重要な関わりを持ってくるのだが、反面彼らは一条権大納言との接点をほとんど有していなかったり、物語終盤において突然登場してきたりと、彼ら自身の重要性にふさわしい背景を持った人物として描かれているとはいえない。一方で一条権大納言物語において主要登場人物の一人であった宮の中納言は、一条権大納言の無二の親友として描かれているも

のの、三の御子を救済するという目的に合致した人物背景ではなかったため、吉野の阿闍梨が巻物を読み終えた後、すなわち後記・挿入されたであろう部分に至ってはその存在意義を失ってしまったのである。

生まれながらに外的要因によって課せられた困難、すなわち自らの出生の秘密と如何に向き合うかを、三の御子は幼いながらに要請されている。一条権大納言あるいは岩田中将もまた外的要因によって課せられた困難に翻弄された人生を歩んでいる。彼らは、結末を除いて非常に似通った人物像として設定されており、それはまた三の御子とも通じるものとなっている。本人に直接的に責任がなく、また対処のしようもない困難に対して、それでも自暴自棄になることなく誠実な生活を送った結果、復権と栄華を得ることとなった岩田中将の物語を、一条権大納言は自らの悲恋およびその結果としての三の御子の出生の秘密を記した物語と並列の形で巻物に記し、三の御子に託すこととなった。岩田中将・かざしの君物語の本質とは、岩田中将の生き様を描き出すことであり、それこそが三の御子の出生の秘密に対して一条権大納言が示した、あるいは『源氏物語』における冷泉院の存在に対して作者が示した解答に他ならないのである。

＊『夢の通ひ路物語』の本文は、『鎌倉時代物語集成　第六巻』（笠間書院）に拠り、表記は私に改めた。

注

(1)本稿では塩田（木村）氏、安道（渕野）氏によって指摘された二十七年間にわたる年立という説を踏まえる。木村公子「『夢の通ひ路物語』の年立と脱落に関して」（『名古屋大学国語国文学』三八・一九七六年六月）、渕野百合子「『夢の通ひ路物語』の年立について」（『国語の研究』一七・一九九二年十月）

(2)塩田氏「『夢の通ひ路物語』の主題―源氏取りの視点から―」（『岐阜女子大学国文学会誌』二〇・一九九一年三月）、安道氏「『夢の通ひ路物語』における「序」の意義―阿闍梨の生い立ちに関わる記事を中心に―」（『国文学攷』一四五・一九九五年三月）

(3)拙稿「『夢の通ひ路物語』主題分析―物語構造と源氏物語摂取の背景―」（『講座源氏物語研究四』おうふう・二〇〇七年六月）

(4)以下の用例に見られるように、三条少将にとっての一条権大納言は、笛の名手であったという程度の認識しかない。

（三条少将）「それもかの笛の聖（＝一条権大納言）さぶらひたまはねば、咲きて散るのみにてはべり。藤はなほ、この頃の御気色に色あせはべらむ」とて、もろともに御物語などまゐる。（二五四頁）

(5)塩田（木村）氏（前掲注（1）（2）論文）

(6)塩田氏「『夢の通ひ路物語』成立考」（『名古屋大学国語国文学』五六・一九八五年七月）

(7)渕野氏「『夢の通ひ路物語』の構想に関わる一視点―「権大納言系物語」と「かざしの君系物語」の融合度―」（『国語の研究』一九・一九九三年九月）

(8)安道（渕野）氏「岩田中将流罪の物語の創作基盤―『夢の通ひ路物語』における先行物語摂取の方法一面・続考―」（『古代中世

国文学』九・一九九七年三月）

(9)安道氏「『夢の通ひ路物語』の構想」（『国文学研究資料館紀要』二六・二〇〇〇年三月）

(10)塩田氏「『夢の通ひ路物語』の一考察―かざしの君をめぐって―」（『後藤重郎教授停年退官記念国語国文学論集』名古屋大学出版会・一九八四年）、同（前掲注（1）（6）論文）

(11)木村氏（前掲注（1）論文）、塩田氏「濡れ衣と流罪の物語―「擬古物語」を中心に―」（『後藤重郎先生古稀記念国語国文学論集』和泉書院・一九九一年）、安道氏（前掲注（8）論文）

(12)注（7）に同じ

(13)塩田氏「『夢の通ひ路物語』の一考察―かざしの君をめぐって―」（『後藤重郎教授停年退官記念国語国文学論集』名古屋大学出版会・一九八四年）

(14)市古貞次『中世小説の研究』（東京大学出版会・一九五五年）「公家小説」内「継子物」の項には、継子物の定義として以下の十項目が挙げられている。

「母の死、継母生ず」「愛人・婚約者生ず」「継母の迫害」「姫の苦難・救助」「母の霊の加護」「姫の動静」「男の苦心」「神仏の加護」「再会（結婚）」「賞罰・応報」

(15)安道氏の前掲注（9）論文では、按察使大納言が岩田中将を陥れた原因は「継子いじめ」の延長であると捉えている。

(16)安道氏の前掲注（8）論文では、物語展開や章句の類似から、『松陰中納言物語』との影響関係の可能性を指摘している。

(17)安道氏は前掲注（9）論文において、用例F「大臣にも、かく仰せ言はべりければ、御位定まらせたまひ、いと幾日頃もあらぬ御ほどにて、うたておぼゆれど」の部分を、左大臣の代理役を果たす右大臣が岩田中将に流罪宣告を行うのだが、岩田中将への好意を背景に「うたて」という感情を抱いたと推測しており、本稿の解釈とは異なる。

(18)渕野氏の前掲注（7）論文では、「かざしの君系物語」に移る段の冒頭表現に着目しているため、本稿にて列挙した用例①⑤（かざしの君に関する噂話）は数に入れられていない。

(19)中野幸一「草子地攷（二）」（『早稲田大学教育学部学術研究人文科学・社会科学篇』一八・一九六九年十二月）

(20)小林美和子「複線型叙述の物語構造に於る効果」（『国語と国文学』五二―一二・一九七五年十二月）

(21)『夢の通ひ路物語』については安道氏も前掲注（8）（9）論文において、改作あるいは後記の可能性を指摘しているが、本物語の「原構想は、二つの悲恋物語（権大納言系とかざしの君系）を描き、権大納言の「夢の通ひ路」で結びつけるという段階まであった」と推測しており、本稿の解釈とはやや異なっている。「後記・挿入」の問題に関して、平安文学における場面生成研究プロジェクト《物語の生成と受容》第六回研究会「『源氏物語』成立論再考」内、加藤昌嘉「紫上系と玉鬘系」（平成十九年度研究成果報告書『物語の生成と受容三』国文学研究資料館・二〇〇八年一月）に大いに啓発された。加藤氏は分析を行う際に「後記」とは、X巻がY巻より後に執筆されたという、成立サイドの用語であるのに対し、「挿入」とは、ABC巻とDEF巻の間にP巻が置かれるという、享受者サイドの用語であると整理している。『夢の通ひ路物語』における岩田中将・かざしの君物語は、作者によって後記されたのか、あるいは後世の別人によって後記されたのか、それに伴い一条権大納言物語の中に作者が挿入した

のか、別人が行ったのかについて、現段階では判断がつかない。よって、ここでは岩田中将・かざしの君物語が一条権大納言物語とは別時期に書かれ、随所に埋め込まれたという意味合いで「後記・挿入」という語を使用している。

(22)工藤進思郎「中世物語における『源氏物語』の摂取に関する一考察―『夢の通ひ路物語』の場合―」(『源氏物語の探究三』風間書房・一九七七年)、安道氏(前掲注(9)論文)

(23)注(3)に同じ

(24)注(3)に同じ

(25)塩田氏「男と女の夢の通い路」(『国文学』三五―一・一九九〇年一月)

(26)注(3)に同じ

(いのもと・まゆみ　本学大学院博士後期課程単位取得退学)